大黒屋光太夫書蹟資料の語学的側面

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2009-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4065

大黒屋光太夫書蹟資料の語学的側面

岩　井　憲　幸

目　　次

Abstract ……（ 2 ）
1　はじめに ……（ 3 ）
2　光太夫の書蹟資料 ……（ 3 ）
3　分類 ……（ 4 ）
4　文字について ……（ 6 ）
5　資料の分析 ……（ 7 ）
6　署名について ……（15）
7　結び ……（17）

—— *Abstract* ——

Observations on the Handwriting and Manuscripts of Daikokuya Kodayu

Noriyuki IWAI

Daikokuya Kodayu was a merchant of Shiroko, Ise who became lost at sea and drifted all the way to Russia, where he stayed for ten years. He acquired basic skills in Russian , and examples of his writing survive in manuscript and fragmentary form in Russia and Germany. He finally managed to return to Japan in 1792.

Upon his return, he created many calligraphic works in the Cyrillic alphabet, the Japanese syllabary, and Chinese characters in his own unique style. This study reports an examination of those works from a philological point of view, and presents the following conclusions:

a) Kodayu liked to use variant forms of characters, both in the Cyrillic alphabet and Japanese or Chinese. He used them, in a sense, with designer's feeling.

b) Kodayu mastered the Cyrillic alphabet and Russian punctuation. The latter is particularly difficult for Japanese because of its total unfamiliarity.

c) Kodayu conceived a method of representing Japanese double consonants in the Cyrillic alphabet. He simply used a "d" with any succeeding consonant, much as the small "ッ" is used in Japanese; e.g. idtoo "one *to* (=4.765 gallons)", khjadpen "100 *cantos*".

d) Kodayu signed his name in Cyrillic as "даикокуя Ко́даю" (with stress mark). This was probably taught him by Cyrill Laksman. In Chinese characters, he wrote his name in various ways as follows : 光太夫, 光大夫, 幸太夫, 幸太輔, but most commonly "光太夫".

《個人研究》

大黒屋光太夫書蹟資料の語学的側面

岩　井　憲　幸

1　はじめに

本稿は，大黒屋光太夫（宝暦1・1751—文政11・1828）が漂流以降死没する迄，すわち天明2年（1782）から文政11年（1828）迄に書き残した種々の文書や断片中にあらわれるロシア語および日本語の文章・語句・単語等を語学的に検討し分析するものである。それによって残された資料の言語的な特徴づけと価値づけを行ない，さらに光太夫の文学感覚および言語感覚にせまってみたい。さらにその応用として，以前より問題とされてきた大黒屋光太夫の署名の表記につき，ひとつの解答を与えるものとする。

2　光太夫の書蹟資料

光太夫がロシアに漂流してから帰国し，死没する迄書いた文字資料は現在のところ次のものが知られている。ジャンルが種々雑多にわたるが，煩をいとわず通し番号を付して年代順に列挙する。ただし28以下は年紀不詳である。また，6・7・8の書き込みの大部分は光太夫のロシア滞在時のものと推定しうる。

1. ゲッチンゲン在日本地図 Asch 284（1789年・寛政1）[1)]
2. 同ジーファースの記念帳（1790年・寛政2）
3. 同日本地図 Asch 285（1791年・寛政3）
4. 同日本地図 Asch 286（1791年・寛政3）
5. 同書簡 Asch 150（1791年・寛政3）
6. 旧レニングラード在浄瑠璃本等書き込み
7. ゲッチンゲン在浄瑠璃本等書き込み Asch 151
8. 早稲田大学図書館所蔵『露国国民学校用算術入門書』書き込み
9. 国立公文書館内閣文庫所蔵〈皇朝輿地全図〉（1793年・寛政5）
10. 早稲田大学図書館所蔵〈芝蘭堂新元会図〉中ロシア文字（1794年・寛政6）
11. 個人所蔵遺墨〈福寿〉（1812年・文化9）
12. 寺崎遜旧蔵遺墨〈福寿〉（1812年・文化9）
13. 鷹見本雄氏所蔵遺墨〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉（1813年・文化10）

14. 同遺墨2種〈寿〉〈鶴〉(1813年・文化10)
15. 鈴鹿在遺墨〈鶴〉(1814年・文化11)
16. 個人所蔵遺墨〈洋数字〉(1816年・文化13)
17. 鈴鹿在遺墨〈鶴，亀〉(1817年・文化14)
18. 個人所蔵遺墨〈福寿〉(1817年・文化14)
19. 早稲田大学図書館所蔵遺墨透写 (1818年・文政1)
20. 亀井高孝旧蔵遺墨〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉(1819年・文政2)
21. 鈴鹿在遺墨〈鶴〉(1819年・文政2)
22. 同〈平仮名文字〉(1819年・文政2)
23. 同〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉(1822年・文政5)
24. 早稲田大学図書館所蔵遺墨〈南山寿〉(1824年・文政7)
25. 個人所蔵遺墨〈南山寿〉(1824年・文政7)
26. 同〈鶴〉(1825年・文政8)
27. 市立函館図書館所蔵遺墨〈魯西亜中興国王…〉(1827年・文政10)
28. 鈴鹿在遺墨〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉
29. 個人所蔵遺墨〈福寿〉
30. 鈴鹿在遺墨〈イロハニホヘト〉
31. 同〈ヤマケフコエテ〉
32. 同〈イロハニホヘト〉
33. 伊坂家旧蔵遺墨〈ヨタレソツネナ〉
34. 鈴鹿在遺墨〈李白一斗詩百篇〉
35. 同〈名月やたたみのうへに松のかげ〉
36. 早稲田大学図書館所蔵遺墨〈行く末は誰が肌触れむ紅の花〉
37. 同〈亀，長寿の嘉瑞なる〉
38. 同〈графъ［伯爵］〉

以上の外に伴信友旧蔵遺墨，亀井高孝のいう扇面〈松〉，さらに書跡の木版刷りおよびいわゆる『光太夫露文日記』等が存在したらしいがその所在をしらない[2)]。また上表中には光太夫の手になるか否か疑問視されるもの，および筆者未見のものを含む。未見は次の通り：6・11・12・16・18・20・23・25・26・27・29・33。ただし多くの場合写真等によって間接的に観察した。

これらの資料のいちいちにつき記述しなければならないが，紙幅の関係上詳述は別稿にゆずり[補注)]，必要と思われる部分だけを述べてゆくことにする。

3 分類

上記資料はさまざまな基準で分類することができる。時間によるそれは，光太夫の帰朝時で前後に

2分する方法である。光太夫の帰朝は寛政4年（1792）であるから，資料1～8を第1グループ，9～27を第2グループ，そして年紀をもたない第3グループを28～38とすることができる。第1グループはロシアの地において書かれ，第2・3は日本の地で書かれた。ただ時間的にみた場合，資料10と11の間に大きな時間差があることは考慮する必要があろうか。いわゆる遺墨の数は現在の資料でみるかぎり，文化9年（1812）から書きはじめられる。むろんこの以前にも，たとえば無年紀の資料が書かれていたのかもしれない。あるいは文化魯冠事件など世間のロシアに対する関心の高まりと，書蹟の出現は関係があるのかもしれない。個人的な出来事として，文化9年に官に請うて剃髪したが名をかえることはゆるされなかった。資料10と11の間の18年間にはたして意味があるかないかは別に検討を要するであろう。ただし，そうすれば，帰朝直後ともいうべき資料9と10は，いわば光太夫においてまだロシアの熱にうかされていた時期であって，その点からすれば，1～8のグループに近いというべきである。むしろこれが資料自体からの時間による分類というべきであろうか。

①第1グループ：1～10.

②第2グループ：11～27.

③第3グループ：28～38.

使用された文字による分類を考える。漢字・仮名をかりに日本文字とすれば，資料に用いられた文字はロシア文字および日本文字であり，次のように資料を分類しうる。

①ロシア文字のみ使用：7, 9, 10, 28, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38.

②日本文字のみ使用：2, 5, 22, 27

③ロシア文字，日本文字の併用：1, 3, 4, 6, 8, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 23, 24, 25, 26, 29.

ロシア文字で書かれていても，ロシア語であるとはかぎらず，日本語のいわばローマ字表記であることがしばしばである。前者は遺墨に限っていえば，すなわち資料2, 10～38中，10と38のわずか2点をかぞえるにすぎない。後者が多数であり，後述するが，そこに光太夫の独自性も認めることができる。

帰朝後の遺墨につき，その書かれている内容を見れば，従来いわれていたように光太夫はおめでたい文字や語句を好んだということは，やはり第1の傾向としてみとめてよかろう。ただ，使用文字の別を考慮外として，細かくみれば次のような内容が書かれている。以下で光太夫遺墨の内容は尽くされる。なお④のe）は喜寿を自ら祝う文章である。

①ロシア語の単語：〈Енуарь〉[3]〈графъ〉[4]

②洋数字：〈1‥‥13〉

③日本語（漢語を含む）の単語等：

a）〈福寿〉

b）〈南山寿〉

c）〈鶴〉

d）〈亀〉

e) 〈松〉

f) イロハ〈イ‥‥ス，京〉

④日本語の文章（俳句・漢詩を含む）：

a) 〈李白一斗詩百篇〉[5]

b) 〈名月やたたみのうへに松のかげ〉[6]

c) 〈行く末は誰が肌触れむ紅の花〉[7]

d) 〈亀，長寿の嘉瑞なる〉[8]

e) 〈魯西亜中興国王‥‥〉

4 文字について

光太夫は日本の文字とロシア文字とを用いた。道具として毛筆，鵞ペンおよび鉛筆を用いた[9]。後2者はむろんロシアにあってが主といえる。日本の文字の使用は光太夫が日本人ゆえ，当然のことではあるが，次の諸点には注意すべきである。漢字の書き方は草・行・楷すべてにわたる。書きぶりは，ことに行・楷書において，光太夫独特の書きぶりをもち，ときとして，亀井高孝のいうように〈やや悪達者な書振り〉[10]となる。字体は異体字を好む傾向を有し[11]，さらに彼一流のデフォルメを行なうことがある[12]。用字法において，漢字の場合，音通[13]による文字を自由に用い，しかも好字をこのむ。さらに，仮名もこれに交えて用いることがしばしばである[14]。これらは今日からみれば，奔放すぎるように感ぜられるが，ある程度は江戸期において一般的なことがらであった。ただし，光太夫はこれらのことを意識的に行なっていたとおぼしく，文字の視覚的な効果を重んじ，時に遊び心も働らいたようにもみることができる[15]。この意識は，ロシア文字による書蹟の場合にも，強く反映していると考える。

ロシア文字について，第一に指摘すべきは次の点である。すなわち，光太夫はロシアにおいて教師というべき者にロシア文字の書き方を正式に習い，彼もまたこれをよく習得していたということである。（彼と伴信友との問答を想起せよ。）おそらく師はキリル・ラクスマンであり，場所はイルクーツク，教科書は『魯西亜国字学』[16]であったろう。形式的な側面では，彼は文字の書法の基本を教わり，さらに18C風の異体もあわせおぼえ，ついで，パンクチュエーションの初歩であるピリオドの使い方を頭にたたきこまれた。光太夫も必死であったろう。レセップスも光太夫がロシア語学習に余念のないことを伝えているが，異文化の体系であるロシア文字の習得は，時代を考え，さらに横文字とも全く無縁であった彼の立場を考えるとき，ひとつの大きな仕事であったろう。少なくともロシアにある時の光太夫のロシア文字は基本に忠実で，しばしば初学者のおちいりやすい誤りをおかさず，きわめて読みやすい文字であるが，時がたつにつれてか達筆の域にも入ってくることが観察できる。ただ〈ъ〉と〈ь〉の本質的差異について感得できなかったようで，ロシア語としては綴りを個別的に覚えたらしくその使用法は正しいが，日本語を表わす場合，動揺している。もっともロシア人においても当時ロシア語の綴りにおいてそのようなことはしばしば生じたらしいのだが。大文字では，

18C風のそれは飾りに富むが，光太夫もこれを用いる。ときにはデフォルメがみられる。小文字の異体では〈в・д・е・к・т・я〉（それぞれ〈в・д・е・к・т・я〉の異体）を用い，さらに〈i͡o〉も用いる（=ио/io)。そして帰朝後の書蹟には，これら異体が同一文字の様々な別形を示すために用いられているのである。このやり方は，日本の文字の場合と同様である。第二に言うべきは，上述の第一の点をうけて，ロシア文字をローマ字風に用いて日本語を綴り，ときに自己の心境を独白しているということ。さらに帰国後は，ロシア文字を彼一流の流儀で「書」に仕立ているということである。むろん光太夫以前のロシアへの漂流民中にはロシア文字を使って日本語を綴った人々がいたわけではあるが，幸いにも帰国し，自己の習得したロシア文字を光太夫のように自在に用いた人物は他にいないこともたしかである。

さて，何の掣肘もうけない光太夫のロシア文字による日本語表記がまとまって観察しうるのは，資料6に含まれる2つの書き込みである。その第1は『森鏡』裏表紙のそれ，第2は『絵本写宝袋』欄外のそれである。これらは分析に値する。

5　資料の分析

この2資料は筆者未見であり，かつまた不鮮明な写真しか与えられていないゆえに，実の処，細部についてしばしば判断に迷う場合がある。しかしながら，その場合を除外しても，光太夫自身の綴り方を窺い知る絶好の資料であることも疑いない。ゆえにあえてここでとりあげる。写真ゆえの不明点はその由を明記する。

『森鏡』裏表紙の書き込み（以下Mとする）を現行体字母によって翻刻すれば次の通りである[17]。ただし，原文の大文字小文字の判定は難しく，したがって意図的に行なった。また写真の状態が悪くピリオド等は見えず，よって翻刻では付さない。なお第1列の数字は行を示す。また文中に漢字を含み，これは一部双行に書かれるが，翻刻では単行に変更した。

1　　Японцу даикокуя Кодаю
2　Коно хонва ханнозя наи Каки
3　тига Каи таножя Соресоре Коно
4　хонва 小浜諌 токужилони тимаено хонто
5　Каете карити Кита Мина 海 е отосите
6　此 Хон бакари нокорита й сацу моноде
7　i͡омунони таi͡oри наи Хокани хонга
8　аритемо намитага коборети домо
9　i͡oмарень

これは次のように読める。

1　　日本人大黒屋光太夫
2　この本は版のじゃない。書き
3　手が書いたのじゃ。それそれこの
4　本は小浜諌トクジロウに手前の本と
5　かえて借りてきた。みな海へ落して
6　此本ばかり残りた。1冊物で
7　読むのにたよりない。ほかに本が
8　ありても涙がこぼれてどうも
9　読まれん。

第1行のロシア語〈Японцу〉は〈日本人に〉の意だが光太夫の誤解とみて上記の意と解する。この言いまわしは彼が多用する。はじめに光太夫の方言的要素につき指摘しておく。エ段をイ段に発音する場合が多くみられる。おそらく光太夫の方言が狭いeの音であったためであろう[18]。例：2-3 Каки-тига［書き手が］，4 тимаено［手前の］，5 карити［借りて］，8 коборети［こぼれて］。語彙として，〈涙〉を清音で発音している：8 намитага.

次にロシア文字の字体をみる。不鮮明ゆえにすべてをつくすことができないが，〈в・д・е・к・н・т・n・N・m〉（それぞれ в・д・е・к・н・т のヴァリアント）をみとめうるし，〈i͡o〉の使用もある。

ついで，日本語がロシア文字でどう綴られているかを，発音どおりに五十音図の表中にあらわしてみると次のようになる。ただし第1行は除外する。表中の空欄は例が存しないことを示す。

行＼段	ア	イ	ウ	エ	オ
ア	а	и, й		е	о
カ	ка	ки	ку		ко
サ	са	си			со
タ	та	ти	цу	те	то
ナ	на	ни			но
ハ	ха				хо
マ	ма	ми	му		мо
ヤ			i͡o		
ラ		ри		ре	ло
ワ	ва				
ン	н, нь				
ガ	га				
ザ		жи			
ダ				де	до
バ	ба				бо
パ					
キャ					
ギャ					
シャ					
ジャ	зя, жя				

チャ					
ニャ					
ヒャ					
ビャ					
ピャ					
ミャ					
リャ					

表中，次の点を確認しておく，①〈イ〉の表記に2つあるが，〈й〉は特例である（ロシア文字として〈й〉が語頭に立つことはない）。②〈シ〉を〈си〉と綴る。③〈チ〉を〈ти〉と綴る。④〈ツ〉を〈цу〉と綴る。⑤〈ハ・ホ〉を〈ха・хо〉と綴り，子音字〈х〉を用いる。⑥〈リ・レ〉を〈ри・ре〉と子音字〈р〉を用いるのに対し，⑦〈ロ〉のみ〈ло〉と〈л〉音字を用いる。⑧〈ジ〉は〈жи〉。⑨〈ジャ〉は〈зя/жя〉とゆれる。⑩長音はこれを無視して短母音字のみで綴る：4 токужи-ло［トクジロウ］，8 домо［どうも］。⑪促音は無表記の場合と，⑪′促音化以前の言いまわしに回避する場合とがある。⑪の例：6 й сацу［1冊］，⑪′の例：6 нокорите［残りて］，8 аритемо［ありても］。⑫二重母音的綴り〈アイ〉等は〈-аи〉と綴る：2 наи［ない］，3 Каи таножя［書いたのじゃ］。（ただし7 таiо̂ринаи［たよりない］の-наиは-найかもしれないが写真不鮮明）。⑬撥音は語中およびこれに準ずる場合（助詞等が接続する場合等）は，〈н〉と綴り，語末とくに文末で〈нь〉と綴る。この〈нь〉の綴りはロシア語的な綴りである。なぜならロシア人は〈ン〉をしばしば軟子音として聞き，〈нь〉と表記する。前者の例：2, 4 хонва［本は］，2 ханнозя［版のじゃ］，4 хонто［本と］，6 此хон бакари［此本ばかり］，7 хонга［本が］。後者の例：9 iо̂марень［読まれん］。

同様に『絵本写宝袋』欄外の書き込み（以下Tとする）も翻刻する[19]。やはり漢字・仮名が含まれる。またパンクチュエーションとして中点・ピリオドと移行符がみられる。今翻刻にあたり中点・ピリオド等はすべて下方につけ，原本において縦書きの日本文字は横書きに変更する。

1 Сатева. С: петербургъ. е пріехалъ иманите. нанацукиме. нинарисоло.

2 Сате. [(イ)] Гоо

3 Сате. сате. Г [(ロ)] =ниганига. ший [(ハ)] жя

4 Коно. куе. ня Маирите. Коноцукини=те. нанацукини, наримосц. соло.=

5 Сорени. [(ニ)] мева.=天下様へ тенкасамае. товош.= (sic)

6 Мосазусоло. Куниева. каисазу.=горанцуева. яразу. тенкасамеава

7 Ватасажу. Женива. Ку=резу. нимосацимо. ницимо. д

8 Сацимо. уго. Касену. Сатемо. Сатемо [(ホ)] мева.

9 Сатемо. [(ヘ)] япоцу (sic). хито=ни. авалемено. Сукосимо наияцужя.= данковуя Кôдаю

10 Коно iо̂ни. укинань. иташсоло. Котомо. Минамина. Кунинитe.

11 Оянихуко. иташсоло. бацинисоло. имава. вагаминоуето. нариникери.

12 Наньнаку. [(ト)] мега. имава. Оянихуково иташсонокавариво.

13 имава. [(ヲ)] мега. = Онини. надте. Семекусарувай. =

14 усоцукино. [(リ)] мезя. [(ヌ)] Кицуй [(ル)] Соно. Кавари.

15 шіньдара. Миланва. леньзано. = накато. Сорево. хитоцу. таношмисоло

16 Наниготомо мина. ● Намуами. дабуцу ● Колебакарижя.

四角の箇所(イ)〜(ル)は墨で消してある箇所であるが，消しあとの一部に残る文字の断片部分や前後関係から(イ)〜(ヲ)は〈Графъ безбородко［伯爵(グラフ)ベズボロッコ］〉を含む語句であると思われ，さらに(リ)〜(ル)もこれらの一部であろう。また，7行の〈нидмосацимо〉の〈м〉の上には〈д〉の小文字（？）が上書きしてあり，さらにこの語全体の下に6文字以上の片カナの書き込みが見られるが判読できない。また第1行〈С: петербургъ〉〈пріехаль〉はロシア語である。2行目〈Гоо〉は意味不明。

いずれにせよ，上記の一文は次のように読める。［　］内はロシア語の和訳を示し，【　】は消しあと分を示し，（　）は日本語を示す。

1 さては［サンクト・ペテルブルク］へ［着き申し候］。今にて七月目になり候。

2 さて【伯爵(グラフ)ベズボロッコめは】ゴオ［？］

3 さてさて【伯爵ベズボロッコめは】にがにがしい【伯爵ベズボロッコめ】じゃ。

4 この国へ参りて，この月にて七月になり申し候。

5 それに【伯爵ベズボロッコ】めは，（天下様へ）天下様へ通し

6 申さず候。国へは帰さず，ゴランツゥへはやらず，天下様へは

7 渡さず，銭はくれず，にっちもさちもにちも

8 さちも動かせぬ。さてもさても【伯爵ベズボロッコ】めは

9 さても【伯爵ベズボロッコ【日本人】】人に大黒屋光太夫 憐みの少しもない奴じゃ。

10 このように憂き難致し候事も，みなみな国にて

11 親に不孝致し候罰に候。今は我が身の上となりにけり。

12 なんなく【伯爵ベズボロッコ】めが，今は親に不孝を致しその代りを，

13 今は【伯爵ベズボロッコ】めが，鬼になって責めくさるわい。

14 嘘つきの【伯爵】めじゃ。【伯爵ベズボロッコ】。きつい【伯爵ベズボロッコ】。そのかわり

15 死んだら未来は蓮座の中と，それをひとつ楽しみ候。

16 何事もみな「南無阿弥陀仏」こればかりじゃ。

ここでも音声上，方言的要素がみとめられる。エ段をイ段で，逆にイ段をエ段で発音する場合がある。前者はMにも存したが，後者はみられなかった。例：6 Каисазу［帰さず］，9 авалемено［憐みの］。後例があることにより，光太夫の方言では上に指摘した通り［e］が狭い母音ゆえ，［i］と混同をおこしうるのであろう[18]。

ロシア文字のヴァリアントはMよりもさらに多様で，〈m・в・п・ᵍ・ε・є・н・N〉(それぞれ＝т・в・в・д・е・е・к・Н）がみえる。〈ю〉もむろん用いられている。Mと同じく五十音図の表をつくると次のようになる。2行目末〈Гоо〉と，9行目上書き〈даикокуя Кóдаю〉は除外し，

後者はのちに述べる。

行＼段	ア	イ	ウ	エ	オ
ア	а	и, й	у	е	о
カ	ка	ки	ку	ке	ко
サ	са	си, ши, ші, ш	су	се	со
タ	та	ци	цу	те	то
ナ	на	ни	ну		но
ハ		хи	ху		
マ	ма	ми	му	ме	мо
ヤ	я				ю
ラ	ра, ла	ри	ру	ре, ле	ло
ワ	ва				во
ン	н, нь				
ガ	га				го
ザ	за		зу, жу	же	
ダ	да				
バ	ба		бу		
パ					
キャ					
ギャ					
シャ					
ジャ	жя, зя				
チャ					
ニャ					
ヒャ					
ビャ					
ピャ					
ミャ					
リャ					

Mの表と対照しながら上表をみる。①〈イ〉の表記に二つあるが，〈й〉を語頭に綴ることはない(Cf. M①)。〈й〉は二重母音の第2要素としてあらわれる（後述⑪)。②〈シ〉はMで〈си〉のみだったのに対し他にシュー音〈ш〉を用いたもの，さらにその母音を脱落させたものの計4種が出てきて，ゆれがある。例：4 наримосц (сиの誤り)[なり申し]，9 Сукосимо [少しも]；3 нигани-га・ший [にがにがしい]；15 шіньдара (sic) [死んだら]；5 товош [通し]，10, 11, 12 иташ [致し]。③〈チ・ツ〉をMは〈ти・цу〉と綴るが，こちらは〈ци・цу〉とともに〈ц〉をつかって綴る。(Cf. M. ③④)。④ハ行は〈ヒ・フ〉ともに〈х〉を用いて〈хи・ху〉と綴る。⑤ラ行はMで〈ロ〉を〈ло〉を綴り，他の〈リ・レ〉は〈ри・ре〉と〈р〉で綴るのに対し，こちらは〈ロ〉の他に〈ラ・レ〉で〈л〉をもつ〈ла・ле〉の綴りを〈ра・ре〉とともに有する。ラ行がゆれている。⑥〈ヲ〉の〈во〉は仮名遣いによって出てきた音であって，この表に含めるのはやや問題がある。Cf. ⑩。⑦

Mでザ行にひとつ〈ジ〉があって〈жи〉と綴ったが，こちらには〈ズ〉を〈зу/жу〉と2通りに，〈ゼ〉を〈же〉と綴り，やはりゆれている。(ただしここには問題あり)。⑧同じく〈ジャ〉はゆれて〈зя/жя〉とあり，Mに同じ。⑨長音はこれを無視して短母音字のみで綴るのが普通でMと同じである。(〈Ко́даю〉は後述)：4 наримосц(sic)(＝си)［なり申し］，6 Мосазу［申さず］，10 Копоїони［このように］，11, 12 хуко［不孝］。頻出する〈соло［候］〉は短音のまま〈ソロ〉または〈ソウロウ〉と長音で読まれた可能性もあり，一概にきめられない。また⑨′長音表記に準じるものとして，仮名遣いにひかれて次のように〈トヲ〉すなわち〈тово〉と綴るものがある：5 товош［通し］。⑩促音は無表記の場合と，⑩′〈д〉を用いてそれを示す場合とがある。⑩″またMのように回避する場合もみられるが，その判定は微妙である。⑩の例：7-8 ницимо сацимо［にっちもさっちも］(ただし［にちもさちも］かもしれないが，後述)。⑩′の例：13 надте［なって］。この⑩′のやり方，すなわち促音を〈д〉で示す綴りはおそらく光太夫の独創とおもわれる[20]。日本語の〈ツ〉の小字による表記にヒントをえたのではないか。〈т〉ではなく〈д〉であることの理由がいまひとつわからないが，しかし，帰朝後の書蹟においても，後読の音が何音であれ〈д〉で表記しているのである。例：資料34に〈їдтоо［イットウ＝一斗］〉，〈хядпенъ［ヒャッペン＝百篇］〉。なお7行目の〈нидмосацимо〉は〈м〉の上に上書きがあって，さらに〈м〉の前に〈д〉を書いているのは〈нидцимо〉のように〈ニッチモ〉と表記しようとしたあらわれではなかろうか。するとこの例は前半が〈д〉を含んでそれによって促音を表記し，後半は促音を無表記にした例で〈ニッチモサッチモ〉と読むべきものかもしれない。いずれにせよ，ここで最重要は⑩′である。⑪二重母音的綴りの〈アイ〉等の〈イ〉を2通りに綴る。すなわち第2要素に〈и〉を用いる場合と，ロシア語的に〈й〉を用いる場合である。Cf. M⑫。例：4 Маирите［参りて］，6 Каисазу［帰さず］，15 Милаива［未来は］；3 ниганига・ший［にがにがしい］，13 Семекусарувай［責めくさるわい］，14 Кицуй［きつい］。⑫撥音は語中および準語中ではゆれて〈н/нь〉と2様に綴るが，語末は〈нь〉のみである。Cf. M⑬。語中の例：5, 6 тенкасамае［天下様へ］，6 горанцуева［ゴランツゥへは］；12 наньнаку［なんなく］，15 шіньдара［死んだら］，15 леньзано［蓮座の］。語末の例：10 укинань［憂き難］。

ここで資料7『花系図都鑑』中の欄外書き込みの内の〈таньжаку」кикоекелеба〉は〈短冊」聞こえければ〉と思われるが[21]，その綴りは上表でカバーできる。とくに語中の〈ン〉を〈нь〉で，また〈レ〉を〈ле〉と綴る点である。

さて，資料8『露国国民学校用算術入門書』の書き込み（以下Sとする）もまた重要ゆえ，M・T同様の検討を行なう。書かれている文字は単語のみゆえに翻刻は割合する。また光太夫の名前の表記については次節にゆずる。字体のヴァリアントとして〈в・д・т・к・е〉(＝в・д・т・к・е)があらわれる。五十音図の表をつくると次のようになる。

行＼段	ア	イ	ウ	エ	オ
ア		i			o

カ	ка		ку		
サ					со
タ	та	ці	цу		то
ナ	на	ні	ну	не	
ハ	ха			хе	хо
マ	ма				
ヤ					іо, ио
ラ		ри	ру	ре	ро
ワ	ва				
ン	нъ				
ガ				ге	го
ザ					
ダ					
バ					
パ					
キャ			кю		
ギャ					
シャ					шо
ジャ			дзу		дзі͡о
チャ					тчо
ニャ					
ヒャ	хя				хі͡о
ビャ					
ピャ					
ミャ					мі͡о
リャ					

上表中，イ段に〈i〉があらわれるが，これは〈и〉と同音ゆえ，M・T と同じとみてよい。〈ヨ〉を〈іо/ио〉と綴る点も注意。ただし他の表記で〈і͡о〉があるから，これも同様とみてよい。撥音の〈нъ〉は語末での1例であるが，〈ъ〉はあるいは〈ь〉と綴ったつもりかも知れず，形の上でやや不明瞭である。それよりもこの資料で注目すべきは撥音の綴りの例が多出することである。まとめれば次のようになる。①撥音の母音をヤ行音に対応する母音字で綴る場合と，①′ア行音に対応する母音字で直音風に綴る場合とがある。①″さらにロシア文字の発音にあわせた綴りがある。②撥音を変母音の表記風に綴ることがある。③撥音での長音は無視されて短音として綴られる。

①の例：хяку［百］，кю［久］，дзі͡о［烝］，хі͡о［兵］，мі͡о［明］

①′〃：дзу［十］，

①″〃：тчо［長］，шо［庄］

②〃：бео［ビヤウ］

③〃：кю［久］，дзі͡о［烝］，хі͡о［兵］，мі͡о［明］，дзу［十］，тчо［長］，шо［庄］

このうち〈дзі͡о［烝］・тчу［十］〉の綴りはロシア語的であり，おそらく光太夫自身による綴りではなく，ラクスマンあたりからの教示によるものではないかと推量される。

さいごに資料13により，帰朝後の光太夫の綴りを知るために，表を作成しておく。〈イ～京〉ゆえ

に表は必要部分のみ示す。

行＼段	ア	イ	ウ	エ	オ
ア	а	ї, ы	у	е	о
カ	ка	кы	ку	ке	ко
サ	са	шы		се	со
タ	та	чы	цу	те	то
ナ	на	ны	ну	не	но
ハ	ха	хы	фу	хе	хо
マ	ма	мы	му	ме	мо
ヤ	я		ю		i͡o
ラ		ры	ру	ре	ро
ワ	ва				
ン					
ザ			жу		
キャ					кi͡o

文字のヴァリアントとして〈ї·ш·ε·i͡o〉がみえる（=i·т·е·io/ио, ё)。多くが飾りの多い大文字筆記体風にかかれている。表中，〈イ〉で〈ї/ы〉が並立し，イ段では母音字は〈ы〉をとるが，特徴的である。〈シ〉を〈шы〉，〈チ〉を〈чы〉，〈フ〉を〈фу〉と綴ることに注意。とくに〈фу〉はM・T・Sになかった。〈ズ〉は〈жу〉と綴る。擁音の長音は短音的に綴る：кi͡o［京］。この表で，帰朝後の光太夫の書蹟はほとんど読むことが可能である。

以上によって，ロシア文字の18C風なヴァリアントが使用されていること，日本語を綴る際〈シ・チ・ツ・ラ・レ・ロ・ズ・ゼ・ジャ〉などで綴り字のとくに子音字でゆれを生じること，長音はこれを無視して短母音字で綴るのが主であること，促音は無表記かあるいは後続音が何であれ〈д〉をはさみこんで表示すること——この方法は光太夫の独創か——，撥音は語中・語尾にかかわらず〈н/нь〉を主に用いること，等の諸点が明らかになった。

Sにみられる〈дзу［十］・дзi͡o［烝］・тчо［長］〉など，音声学的分析を前提とした綴りはロシア人によって教えられて与えられた綴りであろうと推量されるが，これらの内，光太夫において残存したのは，〈нь［ン］〉の場合である。これと関連して，ロシア語で語末に綴る〈ъ〉について光太夫は明確な使用法を体得しえず，さらに〈ь/ъ〉の書き方がよく似ていることから，さらなる混乱を生じることになる[22]。のちに〈ン〉は〈н/нь/нъ〉の3通りに綴られる。長音を短母音字のみで綴るのもロシア的である。ただしこの方式は光太夫において変ずる。光太夫の方言の音声面で特徴的なのは，おそらく〈エ〉の音で，これは狭い母音であったろう。そのためにしばしば〈イ〉と混乱を生じることがあった。初期の段階では〈エ〉は〈е〉，〈イ〉は〈и〉で綴っているが，とりわけ前者はロシア語の発音そのものが［jε］で，大ざっぱないい方をすれば〈イ〉の要素が含まれることから，光太夫には自己の〈エ〉と近い感覚を有して，〈エ：е〉の対応は安定性をもったであろう。〈イ/エ〉の混

同をさけるために，〈イ〉の方の綴りに工夫をおこなったのではなかろうか。すなわちイ段で〈и〉ではなく〈ы〉の音を用いる方式である。ロシア語の〈ы〉は中舌の母音でややあいまいな音であるから，狭い明確な母音の〈и〉よりも日本語に適しているとみたのかもしれない。帰朝後において，〈イ〉が単独で出る場合とくに〈イロハ〉の〈イ〉は〈ï〉と綴るが，イ段では母音文字は〈ы〉と綴られることしばしばである。

6　署名について

光太夫自身が自分の名前をどのように綴ったであろか。ロシア文字によるもの，日本の文字によるものの2通りを検討するが，ここにそれぞれ興味深い問題がかくれているものの，前節・前々節の観点から従来の説に対してひとつの解答を与えることができる。

ロシア文字による署名につき，精密に説をのべた者はいない。漢字になおしていえば光太夫は〈大黒屋光太夫・大光・亀屋兵蔵〉の3つの名を書いている。資料8の表紙裏にのこる〈даикокуя」Ко́даю〉の署名が綴り・字体ともにロシアの地にあっての光太夫自署の典型である。〈д〉が2つでてくるがともに〈ℊ〉，〈к〉も2つでるがともに〈и〉の字体，〈я〉は書法が18C的である。〈К〉の大文字の形にも注意せよ。〈光〉を〈Ко́-〉とアクセント符を付して綴る点は見のがせない。〈太夫〉を〈-даю〉と綴り語末は短母音のままである。ここでは長音を綴るのにアクセント符を付すやり方と，無視して短母音で綴る方法とが混在している。アクセント符がつけられてあれば，ロシア人は強くやや長めに発音するから，目的は達せられる。かかる方式は光太夫のロシア語学習の初期にキリル・ラクスマンあたりから教示された，たぶんこの書き方全体をキリル・ラクスマンあたりから一義的に与えられたのではないかと筆者は想像する。光太夫は署名においてこのアクセント符つきの綴りと字体をロシア滞在中は墨守する。資料7の表紙に残る朱筆の〈1791 Года」 Японцу даикокуя」 Нипонъ Ко́даю〉[23]も同じタイプである。旧レニングラードに残る浄瑠璃本にもどうやら多数のこっているようである。例えば『絵本写宝袋』の見返しに〈Японцу」даикокуя Ко́даю〉とあり，同じものが『曦軍配』四段目表紙にみえる。また上述のT中9行に〈японцу (sic) даикокуя Ко́даю〉とある。なお，Mの1行目〈Японцу даикокуя Кодаю〉の署名はこのタイプのヴァリアントとみられ，〈Кодаю〉の〈д〉が〈∂〉で書かれ〈о〉の上にかぶさっている。写真が不鮮明ゆえに〈о〉にアクセントがあるか，あるいは〈∂〉のひげが〈о〉の上にのびてアクセント符をかねているのか，判断できない。おそらくいずれかの形でアクセント符をもつと想像する。なお，資料5の書簡末および封にある署名については，微妙な点が不明であり，いまはとりあげない。

〈亀屋兵蔵〉[24]は現在はたった1例が，資料8の遊び紙裏にみえる：〈Камея хю̂озо〉。字体は〈е〉を〈ε〉と書く。さらに〈ю̂〉を使う。ここでは〈ヒョーゾー〉中の2つの長音が前半は〈хю̂-о-〉と母音を重ねて綴り，後半は〈-зо〉と短母音のみで無視して綴る。長音を母音字を重ねて綴る方式もすでに考えられていたことを物語り，きわめて興味ぶかい。

資料8の表紙の皮部分に〈даи Ко〉の書き込みがある。通称のひとつ〈大光〉であろうが，ここ

では〈Ко〉と長音は無視して短母音のみで綴られ，アクセント符もない。帰朝後のロシア文字による署名の祖型は早くからここに存する点に注意すべきである。以上から，光太夫はロシア滞在中，長音を表わすやり方を3つ心得ていたことになる。第1はアクセント符を付すこと，第2は無視して短母音字のみで綴る，第3は母音字を重ねて綴るやり方である。第1は自己の署名にのみあらわれ後2者が主に用いられるようになる。

〈даи Ко〉の署名は，帰朝後の書蹟において形をかえて頻出することになる。帰朝後のもっとも早い署名として資料10中のものがある（1794年，寛政6)。〈Даы. коо.〉とあって，〈ダイ〉の〈イ〉が〈ы〉で綴られ，〈コー〉の長音が〈коо〉と母音を重ねて綴られ，しかも必ず両語末にピリオドをうつ。初めの教育の成果である[25]。これが帰朝後の書跡にあらわれる彼の署名の基本形である。資料10の頭文字の〈Д〉は活字体風である〈Д〉に，あるいはかざりをつけて〈Д〉とするもの，その他に筆記体風に〈Д〉，さらに小文字筆記体〈д〉と書くものがある。〈ы〉もさまざまなこまかい書法のちがいをみせる：〈ы・ы・ы・ы〉等々。〈коо〉は活字体風に〈Коо/коо〉とするもの，〈К/к〉を〈К・к〉とするもの，さらに〈оо〉の部分を〈оо・оо〉とひげをつけるものなど，デザイン化された種々のパターンが展開される。なお年紀のない資料36のみ〈Даї. коо.〉と〈ї〉字がでてくる。またさらに署名の前に生国の〈ice［伊勢］〉（ただし〈e〉は〈ε〉）を冠することもあるが綴りは安定している。紙幅の関係で各々の例を掲げることはしないが，要は，〈Даы〉と〈イ〉に〈ы〉を用いること，〈коо〉と長音を二重母音で表わすこと，ピリオドをうつこと，さらにヴァリアントをくみあわせて種々に署名することが，知られたと思う。

次に日本の文字による自署に移る。基本的には〈大黒屋光太夫・大光・亀屋兵蔵・亀兵〉の4つ。いま〈大黒屋光太夫〉のみを問題として，結論的に述べる。①〈大黒屋〉を〈大黒〉のみとし，年令末に〈翁〉字を付加することが66歳（文化13, 1816）以降でてくる。ただし例外あり。②〈光〉を〈幸〉とするものがある。資料2（天明10・1790)・3（天明11・1791）および資料27（文政10・1827）にあり，よって時間による変化はない。③〈太夫〉を〈大夫〉とすることがある。はやく資料3・4（ともに天明11)・5にみえるから時間の経過によって〈大夫〉となったのではない。④〈光太夫〉を〈幸太輔〉（資料2)，〈大黒〉を〈大国〉（資料27）とする例が各1例ある。以上から，光太夫はいわゆる音通と好字をたくみに使って自分の名を書いたことが判明するであろう[26]。ただ叔父の名が〈幸太夫〉ゆえに自分では〈光太夫〉を用い，〈翁〉と自認する頃から〈大黒光太夫〉と名のり，かつ書いたと考えられる[27]。そして筆使いにおいては若年からの〈悪達者〉ぶりで，かつまた異体字を好んだ。

7　結び

光太夫の独特な書蹟は，上で述べたように文字の異体を好み，〈音通〉や〈好字〉を自在に用い，さらにいわば〈悪達者ぶり〉な書法によって，いささか遊び心も加わって形成されたものである。これらが一体となって彼一流の書風が和字においてもロシア文字においてもかもしだされている。さら

に彼の書簡やロシア文字による独白文は小さな文学として，帰朝後のロシア文字による書蹟のあるものは書として，それぞれ鑑賞にたえるほどの境地に達したと評すべきである。だが，ことロシア文字においては，初期の教育の成果と考えられるが，日本人のもっとも不得意とするパンクチュエーションの初歩を後々まで守り，書法においても基本に忠実である。そして応用としてロシア文字による日本語の表記において，促音の表記を独自に考えだした。この時代にあって市井の一個人としてはけっしてささやかな事業ではなかったであろう。高く評価すべきである。これらの反照をわれわれは大黒屋光太夫の書蹟資料のなかに見い出すことができるのである[28]。

〔謝辞〕本稿を草するにあたり国立公文書館，早稲田大学図書館，ゲッチンゲン大学図書館，古河歴史博物館，市立函館図書館および辻正，山口俊彦の両氏に協力を得ました。記して謝意を表します。

注

1) 以下参考のために主たる写真掲載の場所を示しておく。書名は正しくは参考文献のリストにつかれよ。1：『北搓聞略』解説末　2：「窓」85号（1993年6月）p. 26　3, 4：『あけぼの』図20，図21　5：『北搓聞略』解説末　6：『光太夫の悲恋』p. 14（『宝袋』見返し），p. 22（『曦軍配』四段目の表紙），p. 38（見返し）,p. 40（『森鏡』見返し），p. 42(同裏表紙)　7：『あけぼの』図32。ただし巻頭見開きのみ。　8：同図19　9：『北搓聞略』挿絵 p. 2　10：「洋学資料図録」（早稲田大学図書館，昭和43年）口絵　11：『あけぼの』図24　12：「好古類纂」第11集（明治36年）p. 74　13：『あけぼの』図25　14：同図26　15：同図27　16：同図28　17：同図29　18：同図30　20：『北搓聞略』解説末　21：『あけぼの』図31　22：同図32　23：同図33　24：同図35　25：同図34　26：同図36　28：同図39　29：同図40　30, 31, 32：同図41, 42, 43　33：中村楓水『河芸郡史』（復刊，昭和48年）口絵 p. 3　34：『あけぼの』図37　35：同図38　36：同図44　37：同図45　38：同図46．さらに補注に示した拙文の参考写真を見よ。

2) それぞれ次の書に言及されている：酒井憲二〈光大夫談話の伴信友筆記〉（「東洋文庫書報」第23号，1991年）p. 7；『大黒屋光太夫』p. 199；新村出〈伊勢漂民の事蹟〉（『新村出全集』第6巻，筑摩書房，昭和48年）p. 306.　；林若樹〈余の蔵する近世名家の草稿〉，〈若樹文庫入札略目録〉（日本書誌学大系28『林若樹集』青裳堂書店，昭和58年）pp. 660, 591．なお，最後のものについては，次の書の中に〈東京林若吉氏蔵〉の〈漂流人幸太夫日記ノ内〉として2枚の写真が掲げられている：大隈重信『開国大勢史』早稲田大学出版部，大正2年。

3) 資料10中に見える。語中に〈-у-〉があるから〈яннуарій/януарій〉をこう綴ったのであろう。〈генварь〉ではなかろう。参照：『大黒屋光太夫』pp. 204–206，村山七郎〈大黒屋光太夫の言語学上の功績〉p. 17（『北搓聞略』第2刷，昭和40年），『魯西亜文字集』解説 p. 77.

4) 資料38。〈графъ〉は〈伯爵〉の意で光太夫にとって忘れえぬ人物〈グラフ・ペズボロッコ〉との強い連想をもつ。資料6中『絵本写宝袋』欄外書き込みの消し跡を参照。

5) 資料34。出典は杜甫「飲中八仙歌」の第6歌。参照：岩井憲幸〈ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本図について〉（「明治大学教養論集」269号，1994年12月）pp. 201, 215.

6) 資料35。出典は榎本其角の一句で，『雑談集』（元禄4年（1671）成立，同5年刊）所収。

7) 資料36。出典は平賀源内「神霊矢口渡」初段中九条揚屋の段冒頭。この句は芭蕉の句であり，『西華集』（支考編，元禄12年（1699）刊。）などに見られるという（中村幸彦注『風来山人集』岩波書店，昭和36年の注による）。

8) 資料37。出典は今のところ未詳。

9) 鵞ペンの手は資料1・3・5・8に，鉛筆の手は7にある。参照：岩井上掲論文 pp. 160-167, 212-213.

10) 『光太夫の悲恋』p. 36.

11) たとえば資料1・2・3・4・5・8の署名・年紀等を比較せよ。

12) 帰朝跡のロシア文字大文字による遺墨がその典型例。ものによって亀井高孝は雅致を認めている。『大黒屋光太夫』p. 199を見よ。

13) 同上書 p. 45の例を見よ。

14) そのもっともよい例が4の地名表記で頻出する。

15) その典型例が署名の用字である。第6節参照。

16) 参照：岩井憲幸〈鷹見泉石旧蔵ロシア語関係資料若干についての覚書〉「泉石」第1号，古河歴史博物館，1990年.

17) 『光太夫の悲恋』p. 42の写真による。同 p. 43-44のローマ字翻字が，さらに村山上掲論文 pp. 26-27，『漂流民の言語』pp. 256-257にロシア文字およびローマ字の翻刻があるが，微妙な点で筆者と異なる。

18) 岩井上掲論文 pp. 187-188。なお村山上掲論文および同『漂流民の言語』p. 257参照。

19) 『光太夫の悲恋』p. 61および『魯西亜文字集』p. 96の写真による。前者 pp. 60-61および杉本つとむ『北搓聞略』解説 p. 685に日本語の読みがある。

20) このように書いたが，キリル・ラクスマンあたりの音声学的な知見が背後に潜んでいると推量されるが，〈д〉1字に固定してしまったのは――おそらく日本語で〈ツ〉1字でもって表記することと関連する――光太夫においてであったろう。

21) 〈短冊〉の語はこの書き込み下の浄瑠璃本文中に見える。

22) 旧正書法においてはいわゆる硬子音でおわる語はかならず〈ъ〉を伴って綴られた。ゆえに〈нъ〉の綴りはロシア語にありうる。例 онъ［彼は］。一方，日本語の〈ン〉はロシア人には軟音に聞こえ，したがって〈нь〉に綴るのが普通である。光太夫は正書法上の綴りと仮りの音声的表記との差異がわからなかったが，これは無理からぬことであった。

23) 〈1791年」日本人　大黒屋」日本　光太夫〉の意。〈японцу〉はロシア語としては〈японец〉の単数・与格〈日本人に〉の意であるが，光太夫にはその意識がなかったようである。この形で単に〈日本人〉の意味でしばしば使っている。すなわち格変化の観念がなかったと結論づけられるが，これも無理からぬことであった。

24) 〈亀屋兵蔵〉と〈大黒屋光太夫〉の名前の問題については次を参照のこと：『光太夫の悲恋』p. 11～，加藤玄悦『我衣』巻四（『日本庶民生活史料集成』第15巻，三一書房，1971年），仲見秀雄〈遭難以前の大黒屋光太夫〉「三重の古文化」第71号，平成6年3月。

25) パンクチュエーションは近代ヨーロッパ語にとっては基本的な約束事であるが，日本語つまり日本人にはもっとも理解しにくいことであり，この事情は今日でもかわりない。光太夫にあってはロシア文字を草する時，のちのちになっても文や語の末にピリオドを記すのは，よほど教育された結果とみられるのである。

26) 名前の問題につき次を参照せよ：林基〈大黒屋光太夫研究史試稿㈠～㈣〉「窓」77～80，'91年6月～'92年3月。

27) 仲見上掲論文参照のこと。

28) 光太夫の仮名書きによるロシア語の復元に関し，次はきわめて批判的である：城田俊『ロシア語の音声』(風間書房，昭和54年)。その説くところは傾聴に値するが，言語学的検討も順序として必要かつ不可欠と考えられる。

補注） 各資料の詳細は次の拙文を見よ：〈大黒屋光太夫書蹟資料一覧――附参考写真――〉「明治大学教養論集」通巻292号，1996年9月。本稿はこれと対をなすものである。

参考文献（＊注で述べたものは再掲しない）

1. 桂川甫周編著，亀井高孝校訂『北槎聞略』（第3刷）吉川弘文館，平成元年。
2. 亀井高孝『光太夫の悲恋』吉川弘文館，昭和42年。
3. 亀井高孝『大黒屋光太夫』吉川弘文館，昭和45年。
4. 大黒屋光太夫顕彰会編『あけぼの—大黒屋光太夫写真資料集—』平成5年。
5. 亀井高孝，村山七郎『魯西亜文字集』吉川弘文館，昭和42年。
6. 村山七郎『漂流民の言語』吉川弘文館，昭和40年。
7. 早稲田大学図書館『洋学資料図録』昭和43年。
8. 杉本つとむ『北槎聞略—影印・解説・索引—』早稲田大学出版部，1993年。
9. 高野明『日本とロシア—両国交渉の源流—』紀伊国屋書店，1971年。
10. 桂川甫周著，亀井高孝校訂，高野明注『北槎聞略』岩波書店，1990年。
11. 平岡雅英『日露交渉史話』筑摩書房，昭和19年。
12. 奥平武彦〈ギヨツチンゲン大学図書館の日露関係文書〉「書香」45号，昭和7年12月。
13. 仲見秀雄〈大黒屋光太夫らの帰郷文書〉「三重の古文化」58号，昭和62年11月。
14. 川上淳〈ラクスマン来航に関する文献・史料・遺物〉「根室市博物館開設準備室紀要」6号，1992年3月。
15. 伊藤恵子〈アッシュ・コレクションの背景（上）（下）〉「窓」85, 86号，1996年6月，9月；同〈ドイツ資料から見た大黒屋光太夫——アッシュ・コレクションの背景——〉「比較文学研究」65，東大比較文学会，1997年7月。
16. 亀井孝〈晩年の光太夫の横顔〉「日本歴史」538号，1993年3月。
17. 岩井憲幸〈「皇朝輿地全図」と『日本誌』所収日本図について〉「明治大学教養論集」280号，1995年9月。
18. Словарь Академии Российской 1806–1822. (rep.: Изд-во при Университете Оденсе, 1971).
19. Словарь церковно-славянскаго и русскаго языка, СПб., 1847. (rep.: Tokyo, 1989)
20. В. Даль, Толковый словарь живого великорусскаго языка[4], СПб.–М. (rep.: Tokyo, 1984)
21. M. Vasmer, Russisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg, 1953.

（いわい　のりゆき）